

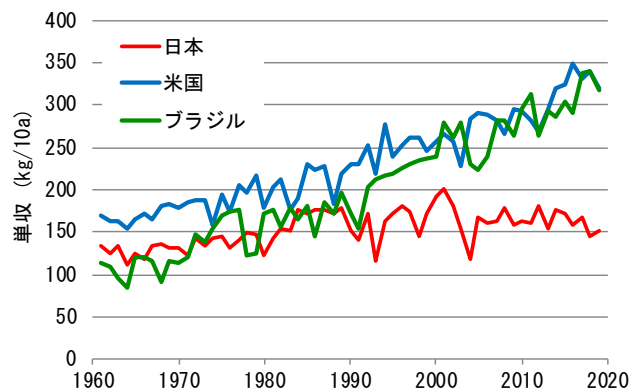
国際競争力強化技術開発プロジェクト 大豆生産基盤強化のための極多収品種の育成 【研究概要図】

1. 研究目的

これまでのプロジェクトで育成してきた極多収系統の現場への導入について生産者や実需者の合意形成を図り品種化・実用化することにより、国産大豆の生産性向上と国産原料の安定供給を図ることを目的とする。

2. 研究背景

大豆の米国等における平均単収は一貫して向上し350kg/10aに達しているが、国内では単収の伸びがみられず150kg/10a程度で推移し、近年は気候変動の影響を受け播種の失敗や生育不良等が発生し、単収が低迷する傾向にあり、100kg/10aを下回るケースも出ており、大豆の単収向上は喫緊の課題となっている。



わが国と米国等における大豆単収の推移 (FAO)

3. 研究内容

- ①多収系統作出のため、収量性に関係するDNAマーカー等を活用した品種育成試験および収量試験等を実施。
- ②多収系統の品種化を図るため、現地栽培試験や実需者評価等を通して生産者、実需者等の合意形成を図る
- ③耐倒伏性強化による安定生産が期待できる短節間性を主要品種に導入し、短節間系統群を作出する。

フクユタカ 多収系統 米国多収品種



多収系統の草姿

4. 達成目標・期待される効果

達成目標

- ・実用的な極多収品種（対標比120%以上、農家圃場で300kg/10a以上）を1以上育成
- ・耐倒伏性強化が期待できる短節間系統を開発



期待される効果

- ・国産大豆の高位安定生産
- ・実需者の国産原料の安定確保
- ・国産大豆を使用した味噌、醤油等の輸出増加

研究代表機関：農研機構・作物研

共同研究機関：農研機構・東北研、西農研、九州研、中農研